

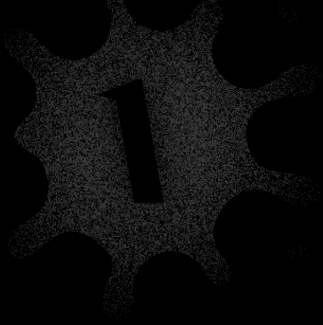
意味がわかると怖い3分間ノンストップショートストーリー

ラストで君は ズルする

PHP研究所／編
TAKA／イラスト

目次

1	イレース機能。 ^{きのう}	雪月海桜 ^{ゆづき み さ}	005
2	うしろの少年だあれ？ ^{しょうねん}	山口智史 ^{やまぐちさとし}	015
3	奇妙なサーカス ^{きみよう}	佐久村志央 ^{さくむらし おう}	025
4	いなくなった転校生 ^{てんこうせい}	あおやままさし	035
5	九死に一生アイドル。 ^{きゅうし いっしょう}	雪月海桜 ^{ゆづき み さ}	043
6	実の母親にオレオレ詐欺と間違われた男 ^{じつ ははおや さ ぎ ま ちが おとこ}	丸子 稔 ^{まる こ みのる}	055
7	ぼくとギンタの32日間 ^{にちかん}	あおやままさし	061
8	嫌いなあの子。 ^{きら こ}	カタクリコナオ	071
9	アーク。 ^{きん}	雪月海桜 ^{ゆづき み さ}	081
10	願いを叶える幽霊 ^{ねが かな ゆうれい}	夏野 青 ^{なつの あお}	091
11	ふたつのごちそう.....	あおやままさし	103
12	放課後とビー玉。 ^{ほうかご たま}	雪月海桜 ^{ゆづき み さ}	111
13	ドコカ.....	つじひなつ	121
14	人魚の血 ^{にんぎょ ち}	夏野 青 ^{なつの あお}	131
15	夕色のチケット ^{ゆういろ}	葉野亜依 ^{はの あい}	141
16	笑顔の街 ^{えが お まち}	マスクドライター	153
17	感情個展。 ^{かんじよう こてん}	雪月海桜 ^{ゆづき み さ}	165
18	じいちゃんの寄り道 ^{よ みち}	高瀬な奈 ^{たかせ な}	177



イレース機能^{きのう}。

ゆづきみさ
雪月海桜



「ねえ、イチカ。イレース機能^{きののう}って知^しってる？」

買^かったばかりのカラフルな映^ばえるドリリンクを片^か手に、レイラはふとわたしに問^といかける。聞^きき覚え^{おぼ}のない響^{ひび}きに、わたしと、まだドリリンクの注^{ちゅう}文^{もん}をしていたスイは首^{くび}を傾^{かし}げた。

「……？ なにそれ？」

「画^が像^{ぞう}編^{へん}集^{しゅう}アプリでね、写^{しゃ}真^{しん}に写^{うつ}った余^よ計^{けい}なものを簡^{かん}単^{たん}に消^けせる機^き能^{のう}なの」

「えっ、そんなのあるんだ？」

「しかも最新^{さいしん}AI^{エーアイ}で、人^{ひと}を消^けしたあとの背^{はい}景^{けい}も予^よ測^{そく}再^{さい}現^{げん}してくれるのよ」

「へー……すごいね！ わたし盛^もるのは得^{とく}意^いだけど、消^けすのはや^やったことないや」

今^{いま}時^じほとんどの人^{ひと}が持^もっているスマ^{スマート}トフ^{フォン}。これ一^{いち}台^{だい}あれば、誰^{だれ}でもタ^タッピ^ピひとつで簡^{かん}単^{たん}に写^{しゃ}真^{しん}が撮^とれる。レ^レトロブ^{ーム}はあれど、フイ^{フィルム}ルカ^{メラ}と違^{ちが}ってス^{スマ}ホはすぐ^にに撮^とったものを確^{かく}認^{にん}できるし、取^{しゅ}捨^{せん}選^{せん}択^{たく}が楽^{らく}な分^{ぶん}、手^て軽^{がる}にた^たくさん^の写^{しゃ}真^{しん}が撮^とれるのだ。

有^{ゆう}名^{めい}カ^カフエの映^ばえス^スイーツしかり、そこら辺^{へん}の道^{みち}端^{ばた}ですら、何^{なに}かあれば撮^とる人^{ひと}は居^いるだろう。写^{しゃ}真^{しん}は手^て軽^{がる}で、身^み近^{ぢか}で、しかも今^{いま}という瞬^{しゆん}間^{かん}を閉^とじこめられる、特^{とく}別^{べつ}な魔^ま法^{ほう}のよう^にだ。か^かく言^いうわ^わた^たし^しち^ちも、今^{きょう}日はこ^こうして遊^{あそ}びに來^きたテ^テーマ^マパ^パークで、た^たくさん^の写^{しゃ}真^{しん}

を撮ったばかりだった。

「……あ、ここまで撮った写真、二人にも送っておくねえ」

「ありがとうスイ！」

「思ったよりたくさん撮ったわね……」

三人でベンチに腰かけ、これまた何枚も撮影したカラフルなドリンクを飲みながら、わたしたちはスイから送られてきた大量の写真を確認する。まだ昼過ぎにもかかわらず、すでに百枚近く撮っていた。

明らかな手振れ写真や変な顔に写ったものは削除しつつ、似たような写真の中でもS用により良いものを選んでいく。これからさらに増えるのだ、大量の写真を一気に見比べるのは大変なので、今のうちにある程度の目星はつけておきたかった。

そんな中でも特にお気に入りの一枚は、テーマパークのメインである、お城の前で撮ったスリーショットだ。先週新調したばかりの二人おそろいのスマホカバーを見せながら、顔の半分を隠すようにして写っているわたしとレイラ。

撮影担当のスイはスマホを小道具として使えないから、一人別のポーズで写っている。

「あれ？ やだ、これ知らないおじさん写ってる！」

そんなスリーショットを眺めていると、撮影時に人の居ないタイミングを見計らったにもかかわらず、画面の端に写りこんでいた見知らぬおじさんの存在に気づいた。

せっかく可愛く撮れたのにと悔しくなったわたしは、つい先ほどレイラが教えてくれた便利な機能を思い出す。

「こういう時こそ、イレース機能？ の出番だね！」

「そうね。ほら、編集画面の……ここの消しゴムのマークがあるでしょう？ それを押し
てから、こうして消したいものをなぞると……」

わたしと同じデザインの紫色のネイルが輝く指先で、レイラが画面の中のおじさんを
なぞる。すると、邪魔なおじさんは背景に溶けるようにして、一瞬で消えてしまった。

その様子がまるで魔法使いのようだと、わたしは笑みを浮かべる。

「わつ、おじさんが消えた！ すごいね、これ」

「へえ……便利だねえ。私もイチカちゃんやレイラちゃんと一緒にないと、自撮りな
てしないから、知らなかった……」

スイも興味深そうにわたしのスマホ画面を覗きこんでうなずくと、同じように自分のスマホを操作し始める。けれどスイのスマホはわたしたちとは機種が違うから、似たアプリを探して少し苦戦しているようだった。

「まあ、背景はAI製だから、ちよつとゆがんでたりするんだけどね」

「そこに居る人を消すんだから、そりやあゆがみも出るよね……」

例えば、お洒落な空間に落ちているゴミとか、綺麗な風景を邪魔する電柱や看板みたいな、意図せず写りこんでしまう余計なもの。タイミング悪く写りこんでしまう通行人や、わたしたちと同じように写真を撮り合っている他の人たち。

指先ひとつで簡単に邪魔なものが消せて、わたしの残したい理想的なものだけが写った写真になるのだ。嬉しくなったわたしは、早速他の写真でも試してみることにした。

どれにしよう。さつきスイが撮ってくれた、ジュースを持ったポーズのレイラとのツーショットがいいかもしれない。わたしのピンクと、レイラの紫色のネイルが、それぞれ持つ同じ色のドリンクと合わさって、とても可愛く撮れている。アプリでいい感じに盛って、最後に見切れた通行人を消そうか。

「なんかこういうの、今までスタンプで隠したり、無理やりトリミングしたりしてたから……消えるとなるとまた違う感じ」

「ふふ。ものによつては消しにくかったりするんだけどね、なかなか便利でしょう？」

「うん！　ありがとうレイラ、加工が捗る！」

せつかく三人でテーマパークに来ているのに、遊ばずベンチに並んで座りながらそれぞれスマホに向き合っているなんて、他の親子連れやカップルから見たら変な光景だろう。

けれどここには先週もレイラと二人で来たし、そのときにアトラクションはほとんど制覇したこともあり、わたしはすでに満足してしまっていた。

「あ、こつちの写真もいい。レイラとの色違いコーデ、このショップの壁に映える。スイ、本当にいい仕事してるじゃん！」

「えへへ、そうかなあ……」

今日はスイが居るから、たくさん他撮りや全身写真を撮ってもらえる。ここに来る途中、スイは数年振りのテーマパークだとそわそわしていたから、わたしたちが指示しないと写真を撮るのを忘れて遊んでしまうだろう。それではスイを連れてきた意味がない。

これまでの写真^{しゃしん}をすべてチェックして、他に撮^とりたいものを決めておきたかった。

「あ。消^けせるアプリ、これかな……」

「スイも見^みつけた？」

「うん……外部^{がいぶ}アプリなんだけど『いらない人^{ひと}を消^けす機能^{きのう}』だよな？」

「そうそう、そんな感じ^{かんじ}の」

スイはようやくアプリを見^みつけたようで、早速^{さつそく}スリーショットを加工^{かこう}しているようだ。つた。

わたしもレイラもSNS^{エスエヌエス}に載^のせるための写真^{しゃしん}は加工^{かこう}し終^おわったし、スイのその一枚^{いちまい}が終^お

わつたら、そろそろ次^{つぎ}に行^いこう。

夜^{よる}にはパレードの写真^{しゃしん}も撮^とりたいし、明^{あか}るい内に園^{えん}内にたくさんある可愛^{かわい}いオブジェの前^{まえ}でも撮^とってほしい。今日^{きょう}はそのために、ヘアメから靴^{くつ}までこだわりの全身^{ぜんしん}コーデを組^くんだのだ。せっかく写真^{しゃしん}映^ばえするスポットに来て^きいるのだから、時間^{じかん}を無駄^{むだ}にするわけにはい^いかない。一分^{いっぷん}一秒^{いちびょう}も惜^おしくて、わたしは「早く消^けしちゃお」と急^せかすように言^いいながら、何か^{なに}を消^けそうとしているスイの手元^{てもと}を覗^{のぞ}きこんだ。

き けつまつ
気^きになる結^{けつ}末^{まつ}は
ほんべん
本^{ほん}編^{べん}でチエック!



3

き みょう
奇妙なサーカス

さ く むら し おう
佐久村志央



もしもし、その君。そう、このお話を読んでいる君のことですよ。

そろそろ恐怖で背中が寒くなってきた頃でしょう？

まだこの本を読み進めるつもりですか？

なるほど、怖い話が大好きでつい夢中になってしまうんですね。

それなら君に、私からとっておきのお話をして差し上げましょう。これは、アコちゃん
とサーカスのお話です。

アコちゃんは、怖い話が大好きな女の子。

学校でウワサになってる呪いのメールも、血がいつぱい出てくるホラー映画も、主人公
が恐ろしい目にあう怪談も、恐怖で瞳をキラキラさせながら飛びついてしまうのです。

ずっとそんな調子だったので、いつしかアコちゃんはどんな怖い話もすっかり知りつく
して退屈してしまいました。その頃には、みんながまことしやかに語る体験談も作り話だ
と気づいてしまっていたのです。

「誰も聞いたことのないような、本物の怖いことが起こらないかな」

学校がっこうからの帰り道かえ みち、アコちゃんはそのなひとり言ごごをこぼしながら歩いていました。夕焼ゆうやけが、アスファルトの地面じめんにアコちゃんの影かげを黒く長く縫ぬいつけています。

その時とき、アコちゃんの影かげに覆おおいかぶさるように、後ろうしから細長い影ほそなが かげがぬつと現れ、頭あたまの上うえからやけに甲高い声かんだか こえが降ふつてきました。

「あなたは怖い話はなしがお好きなのですわね！」

振り返ると、ひよろりと背せの高い男おとこが後ろうしに立たつて、にんまりと笑いながらアコちゃんを見下ろしていました。男おとこが頭あたまにかぶっている、手品師てじなしが使うようなシルクハットが夕日ゆうひの逆光ぎゃくこうになって黒く浮うかび上あがっています。

「だ、だれ？」

「私わたしはこの近くでサーカスの団長だんちやうをやっている者ものです。ハラハラドキドキ、そしてゾクゾクする恐怖きふのサーカスへご招待しょうたいに参まゐりました」

突然とつぜんの申し出でにアコちゃんはためらいました。けれど、怖いもの好きずとして「恐怖きふのサーカス」という響ひびきがどうしても気きになつてしまいます。

「楽しそう……」

「楽しいですとも。特に、怖いことが好きな方には気に入っていただけだと思いますよ」

「私、そのサーカス見てみたい！」

「ええ、ええ。そうこなくっちゃ！ それでは参りましょう！」

そう言ったと同時に、シルクハットの団長はアコちゃんの手を取り、躍り出るように大きく一步を踏み出しました。いきなり引つ張られたので、アコちゃんもバランスをくずしながら足を踏み出します。

その時です。不思議なことが起こりました。

はつと顔を上げると、そこは、さっきまでいた通路路ではありませんでした。サッカースタジアムのように、広い円形の地面をぐるりと空つぽの観客席が取り囲んでいます。アコちゃんはその観客席の最前列、一番良い席にぽつんと座らされていました。

「ここは……？」

あたりを見回したアコちゃんは、ようやくそこがサーカスのテントの中だと気づきました。驚いていると、舞台の中央に一筋のスポットライトが当たります。そこにはさっきの団長が立っていました。

「ようこそお客様！　ここは、世にも奇妙な影のサーカス。まずは、定番の綱渡りから」
団長がオーケストラの指揮者のように腕を振り上げると、アコちゃんのはるか頭上でなにかたくさんの気配が動き出しました。

よく見ると、サーカス小屋の天井近くに一本のロープが張ってあります。そのロープの上を年齢も性別もバラバラの人たちが何かに引つ張られるように、そろりそろりと進み始めています。

その人たちの動きがやけにぎこちない理由は、しばらく観察したらわかりました。

「あの人たちの影が引つ張ってるんだ」

そう、普通は持ち主と同じ動きしかしないはずの影が、まるで意思を持ったかのように動いているのです。そのため足先で影とつながった人間の方も、影と同じになるように動かされているのです。

誰も綱渡りなんてしたくないのに、影に逆らえないのです。

団長もアコちゃんと同じく不怡好な綱渡りを見上げていましたが、軽い調子でぽつりと言いました。

「素敵すてきでしょう。ここは影かげが主役しゅやくのサーカスなのです。ただ難点なんてんは、影かげに綱渡りつなわたは不向きふむきなことですが」

すると、団長だんちやうの言葉ことばを聞いたかのように、ロープから足を踏み外はずした影かげが上から真つ逆さかさまに落ちおてきました。もちろん、その影かげの持ち主ぬしである人間にんげんも一緒いっしょに。

それに続つづくように、他の挑戦者ちやうせんしやもどんどん落下らくかしていきます。影かげに引ひつ張ばられて一緒いっしょに落ちおていく人たちのうちの一人ひとりの、恐怖きようふに見開みひらいた目めがアコちゃんを見た気きがしました。

落ちた先さきはサーカスの機材置き場きざいおの裏うらだったので、彼らかれがどうなつたかはアコちゃんにはわかりません。けれど、きつと無事ぶじでは済すまないでしょう。

「あの失敗しっぱいした人たちは、このあとどうなるの？」

「もう一度いちどスタートからやり直なおします。何度なんどでも、成功せいこうするまでね」

影かげに操あつられて、あんな高い場所たかばしよから何度なんども落ちおることになるなんて。アコちゃんは興奮こうふんで息いきをするのも忘わすれるほどでした。

「さて、次つぎは火の輪わくぐりです」

団長だんちやうが手てで示しめした先さきにあったのは、ごうごうと音おとを立てて燃え盛さかる火の輪わでした。

その少し先に、やはりおびえた表情をした人たちが立っています。

おどるように揺らめく炎に照らされ、地面に映る影たちはよりいつそう黒々と、張り切っているように見えました。対照的に、その影と足元でつながっている人間たちは、客席から見てもわかるほどの汗をかいて、顔色もよくありません。逃げ出せるなら今すぐ逃げ出したい、とでも言いたげな表情は、アコちゃんがホラー映画で何度も見た登場人物とよく似ていました。

ステージで派手なドラムロールが鳴り始めます。ついに影たちが炎に向かって走り出した瞬間、アコちゃんも炎の熱さを想像して思わず目をつぶりました。

それでも、影に操られた人たちが熱い炎をくぐり抜けた瞬間の叫び声は、アコちゃんの耳の奥まで突き抜けてきたのでした。

その後もずっとそんな調子で演目が続きました。空中ブランコも、人がトランプタのように積み上がる人間ピラミッドも、長い刀を丸呑みする奇術も、楽しげに演じてのは影の方だけで、それに引つ張られる人間はみな恐怖に顔をひきつらせているので

こんな体験は初めてでした。

き けつまつ
気になる結末は
ほんべん
本編でチェック！